

# ニュージーランドの学校教育実践

神 田 嘉 延

鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要

第 9 卷 抜 刷

1999年11月

# ニュージーランドの学校教育実践

## School Education Practice in NEW ZEALAND

神田 嘉延\*  
(Yoshinobu KANDA)

キーワード：父母参加による教育実践、農村教育、貧困問題、中等教育、初等教育

### 目 次

はじめに

#### 第1章 小学校の学校教育実践

- (1) 小学校教育のしくみとカリキュラムの特徴
- (2) パーマストンノース市の近郊の小規模学校  
－ヒウヌイ小学校の教育実践－
- (3) パーマストンノース市の新興の開発地域の小学校  
－コーナーストーン小学校の教育実践－

#### (4) 純農村の小学校の教育実践

－タラキナ小学校－

#### (5) 純農村のハンタービレ小学校

#### 第2章 ニュージーランドの貧困問題と小学校

- (1) タグモアナ小学校の事例－
- (2) ワンガヌイ市キャッスル小学校の実践

#### 第3章 中等教育の学校教育実践

- (1) ニュージーランドの中等教育の現状
- (2) パーマストンノース市のガールズハイスクール
- (3) パーマストンノース市街から郊外の農村の中等学校  
－ロングバーン・アドベンテスト・カレッジ－
- (4) 酪農地域のオプナケ高等学校

はじめに

本稿では、ニュージーランドにおける小学校と中学校の学校教育実践を具体的な学校に即してのべます。この事例の学校教育調査は、1999年の2月から6月に実施されたものです。そして、ニュージーランドのコミュニティと学校を考えていくうえで、小学校の役割を重視する立場をとりました。

小学校の調査は、コミュニティを重視するということから農村地域の調査を中心にしました。また、小学校の調査では、独自に貧困地域の調査を行いました。とくに、貧困地域における教育実践を地域の教育力の視点から調査を実施しました。

ニュージーランドの中等教育の学校は、都市部と農村でもある一定規模のもっている市街にあるのが特徴です。

かつては、エリアスクールといって、小学校と中等教育学校を一緒にした学校が農村に数多くありましたが、現在では、その学校は少なくなっています。したがって、多くの農村の子どもたちは、農村市街地や都市にいかねば中等教育を受けることができない状況です。また、学校選択が自由に行われ、それぞれの中等教育学校が特色をだして、生徒募集をしている状況です。

大学教育が生涯にわたって気軽に受けられ、また、それぞれの科目ごとに、どこの大学でも教育が受けられ、どの科目をとったかということが、社会的に評価されるしくみになっていますので、大学選択をめぐるの厳しい受験競争がありません。このことが、中等教育の学校選択をめぐるの厳しい序列を作らないことにも反映しているのです。

中等教育が5年制になっているということが日本との大きな違いです。本調査は、パーマストンノース市のガールズハイスクールを一般的な中等教育学校の事例として選びました。また、パーマストンノース市の近郊農村にあるクリスチャンの学校で、少人数の特徴のある教育を実施しているロングバーン・アドベンテスト・カレッジを選びました。農村市街の中等教育学校としては、タラキ山の麓のビーチの近くにあるオプナケ高等学校の事例を明らかにしました。

\* 鹿児島大学教育学部学校教育（教育学）

## 第1章 小学校の学校教育実践

### (1) 小学校教育のしくみとカリキュラムの特徴

ニュージーランドの小学校は、8年間の教育です。入学は5歳の誕生日をむかえると小学校に入学できるしくみになっていますが、義務教育は6歳から16歳までの10年間となっています。一斉に入学の時期と年齢を指定していないところは、日本と大きく異なるところです。入学が5歳でも6歳からでも同じように子どもは待遇されます。小学校の入学は、人生における最初の社会的参加ということで重視しています。つまり、のんびりと学校生活になれるよう配慮がされているのです。

小学校の教科は、ナショナルカリキュラムの指導要領として、英語、算数、理科が示されています。英語は話す、聞く、書く、読むということを大切にしています。そして、社会研究、芸術、手芸、保健体育、技術、家庭などを学習しています。また、多文化教育として、先住民のマオリの文化を学校教育のなかで重視しているのも特徴です。

ニュージーランドの教科で、日本の小学校と特別に異なるのは、社会研究という科目があることです。日本の社会科と大きく異なっています。社会研究では、8つのレベルからなっていますが、小学校の教育では、3段階のレベルまで教えることになっています。中等教育段階になりますと、地理、歴史、経済などの社会科学的教科と一緒に学ばれますが、小学校では、社会研究によって、日本という社会科の領域の学習をしているのです。

社会研究の社会組織のレベル1は、なぜ人々はグループに属し、また、人々はグループのなかで異なる役割を果たして行くのかということを実体的に学びます。レベル2は、コミュニティや社会のなかで、どのようにして、なぜグループを組織していくのか。責任と権利の両方をグループのなかでどのように統一させて参加していくかということを学んでいます。

第3のレベルは、グループのリーダーシップをどのようにしたら身につけられ、発揮できるか、社会的規則、法律を人々はなぜつくり、利用するのかということをおぼくこととしています。以

上の3つの社会的組織の課題を小学校段階の8年間の社会研究で学んでいるのです。さらに、中等教育の段階では、レベル4からレベル8まで社会科学の知識を加えて学んでいるのです。

社会研究は、子どもたちが社会に責任ある参加をできるように、かれらを民主主義の担い手として発達させるために、学習させているのです。この教科は、次の5つの要素からなっています。社会組織、文化と遺産、地域と環境、時・継続・変化、資源と経済的活動。この5つの要素にそって、それぞれ8つのレベルが規定されているのです。そして、5つの要素は、具体的で、価値の問題探求が必要であるとしています。また、社会的決定をつくっていくことが求められています。社会的研究は、ニュージーランドの民主主義を具体的に学習していくための教科なのです。

ところで、公立の小学校でも伝統的な公立学校と以前に私立学校の形態をとっていた学校ですが、従前の教育内容を維持できるというインテグレイトスクールの公立学校形態があります。この学校設置形態は、80年代からの教育改革のなかで生まれたものです。ナショナルカリキュラムに規定されますが、教育内容について自由裁量権を大幅に認められたということで増えた公立学校です。

この他に、私立学校、マオリ学校、通信教育学校、ホームスクールという学校設置の形態があります。1997年の教育省の統計では、2293の小学校がありますが、私立学校は、58校、公立学校が2235校となっています。従前の教会経営による学校設置形態は、インテグレイトスクール形態という公立のなかで自由裁量権をもつ学校経営に変わっているのです。

1997年の教育省の調査結果では、小学校の規模で最大のものは、762人で、小学校の規模の平均的なものは181人になっています。57人以下が25%です。日本と比較すると小学校の規模は小さく、都市においても日本のような大規模な小学校は存在しないのです。

### (2) パーマストンノース市の近郊の小規模学校 －ヒウヌイ小学校の教育実践－

最近のニュージーランドのライフスタイルの新しい動きとして、都市で職場をもって、農村で3

エーカーから5エーカーの土地をもって、休日に農業を楽しみ、子どもを農村の学校に通わせるという家庭が生まれています。しかし、全体的な農村から都市への人口移動は若者を中心として起きていることには変わりません。

ヒウヌイ小学校は、パーマストンノース市から15キロほどいった農村にある小学校です。小学校8学年の生徒は65名で、校長先生と3名の正規の教員が配置されていますが、親の教師として、父母のなかで得意な教科、実技、体験をもっている人が、補助教員としてクラスのなかに2人から3人毎日配属されています。3日間、2日間のパートタイムの教師ということになっています。

クラスには、正規の教師以外に補助の教師が2名から3名程配属されているのです。子どもの教育のために親からの教育経費の支払いはありません。ニュージーランドは豊かな地域と貧困な地域に分けて、基準を決めていますが、この小学校は経済的に厳しい地域として、児童ひとりあたり60ドルが国からの学校の予算として加算されています。

10年程前は、学校にくるほとんどの子どもは農業をやっている家庭でしたが、現在は、大きく変化して、親が農業をやっているのは20%程度です。新しいライフスタイルで農村に移り住んできた家庭などでパーマストンノース市や近くに職場をもって通勤する親たちによって、学校が新たな活気を取り戻しているのです。

1891年に24人の子どもで創設された伝統ある小学校ですが、あたらしいライフスタイルの親によって、小学校も新しい展開をはじめたのです。学校にたいする地域住民の協力が大きいことも、この学校の特徴です。親たちは、学校の建物のペンキ塗り、アスレチックなどのスポーツ施設の整備などを積極的にしています。

学校教育の内容は、親や子どもの要求によって、変えていっています。ボードオブトラスティーズがリーダーシップをとって学校の経営にあたっているのです。ボードオブトラスティーズには5名の親の代表、教師の代表、校長という構成で運営されています。学校への地域の協力は、親たちばかりでなく、地域のコミュニティ組

織が全面的に応援してくれるしくみになっていますので、ボードオブトラスティーズが地域住民に応援してもらうこともスムーズにいくのです。

この学校の特徴ある教育施設として、大きな荷台のトラック車を改造して、モービルクラスをつくっていることです。このクラスは、自然、動物、人間の体、脳の役割、5感覚の意味などを教えています。また、音楽など子どもが楽しく勉強できるようにつくったものです。ハイテクの技術を利用しての幻想的な場面設定がされています。ビデオ画像、人形やキリンの模型が突然現れる装置、音楽装置など様々な工夫がされています。

子どもに、人間と自然の関わり、人間の体や命の大切さ、飲酒運転・麻薬のこわさなど、生きることを仮想体験をとおして教育しているということです。この施設は地域の親の協力と寄付によってつくられたものです。

また、教育実践においても地域の親の援助があります。正規の教師ばかりでなく、地域の親の様々な協力のもとに実際の授業が行われているのです。親ばかりでなく、祖父・祖母、卒業生が学校に自由に、これるように特別な配慮もしています。学校の開放日を設けて、かれらが容易に学校にこれるようにしているのです。このように学校のプログラムによって多くの地域住民が子どもの教育に協力しているのです。

子どもの親の80%は、フルタイムかパートタイムで働いています。約20%の家族がフルタイムの農業に従事しています。60%の人が小さな土地をもち、農業以外の職業についています。そして、学校に通う25%の子どもの家庭は、町に生活していて、商業や専門的な職業をやっているのです。この地域の中等教育に通う子どもは、パーマストンノース市の学校にいきますが、小学校では、町から農村に通う子どもがいるのです。

授業は正規の教師だけではなく、親が教師として、実際に学校教育活動にも積極的に参加しているのです。特別に地方の農業青少年クラブの活動や、スポーツ活動を実施しています。また、近くの町や都市の芸術出品活動、作文創作活動、スピーチ活動などに学校教育としても位置づけているのです。これには、子どもの活動を支えるため

の親の能力を組織化していく方法として、小学校の組織が大きな役割を果たしているのです。

子どもの数は、65名ですが、クラスは3つしか設けていません。5歳から7歳までの低学年、8歳から10歳までの中学年、11歳から13歳までの高学年と8年間の小学校を3つの段階のクラスに分けて教育をしています。専任の教師や親の教師のスタッフばかりでなく、上学年は下の段階のクラスの援助もするしくみをとっています。そして、オープンシアの教育方法の方策をとっているのです。

われわれが、この小学校を訪問したときは、2名の児童が学校代表として、挨拶するなど子どもの自治を尊重しての教育的配慮がされているようです。複数の学年によって、学習するということで、上級の児童が、みんなの面倒をよくみているのです。

ところで、筆者は、クラスにいて、子どもたちから日本の簡単な紹介をねだられ、楽しく、授業に参加させてもらいました。上学年のクラスの子どもたちは、お礼にとみんなで合唱をしてくれたのです。

### (3) パーマストーンノース市の新興の開発地域の小学校

#### ーコーナーストーン小学校の教育実践ー

コーナーストーン小学校はパーマストーンノース市の中心市街から車で20分ほどいった新興の開発地域の小学校です。小学校の近くは、農村風景が、まだ残るなかで、まばらに新興の住宅が建設されはじめています。子どもの多くは、パーマストーンノース市街地または、近くの町から、親の車によって通学してきます。学校のはじまりは、9時で、終了時間は3時です。この学校に子どもを通わせる多くの親は、キリスト教を信じ、子どもの教育をキリスト教の精神で教えてもらいたいと望んでいる豊かな家庭です。

この小学校は、伝統があり、1887年に創設の歴史をもっていますが、教会のなかの私立の小学校として、発展してきました。1995年に一般の公立学校として、再出発したのです。この小学校は公立学校になりましたが、特別な性格をもっている学校として、教会の精神の教育は、継続されてい

るのです。

しかし、教会精神の教育もナショナルカリキュラムとの関係で実施されていくことが義務づけられたのです。私立のとき、親は年間2500ドルの教育経費を支払うことが必要でしたが、現在は、525ドルですんでいます。

特別な性格をもつ学校ということで、生徒数によって教師の給料や学校の活動経費の教育予算は教育省から受けられますが、特別な設備費や建築費などは経費をだしてくれないため、学校としても独自に教育経費を親からもらって、予算をくまなければならない状況です。

この小学校は、50名ほどの児童から再出発したのですが、5年で急激に増大して、今年の2月からの新学年では、147名になっています。今年も2つの新しいクラスが生まれ、毎年クラス増になっています。

教師は、フルタイムの正規の教師が6名、パートの教師1名、補助教師が3名です。他にボランティアの親の補助教員が15名ほどが、毎日の午前中の読書活動に参加しています。親の場合は、授業を手伝える人が、教育ヘルパーとして、参加しているのです。

授業は、1クラス27名になっていますが、一斉の授業方式をとらない科目が多いのです。読書活動にしても、それぞれのグループをつくって、子どもたちが勉強しているのです。そこに、補助教員が指導にあたるのです。この学校の基本的な教育方針は、子どもの教育の責任は親にあるという考えから、親に教育活動に参加してもらうことを実施しているのです。

現在は、4年生から8年生までをロバートラインという地域に6.5ヘクタールの土地を購入して、1998年からあたらしい学校の施設で5学年の教育を実施しています。現在のクラスの人数規模は、27名になっています。学校教育の内容は、親から、地域から気軽にみえるように教室の建築は、大きなガラス張り授業のようすが外から、誰でもみえるようになっています。

1年から3年までは、フェザーストーンストリートという市街地の古い学校施設で教育がされています。3年から4年先には、3歳から5歳未

満までの幼稚園から5年間の中等教育学校も設立して、幼稚園、1年から13年まで小学校、中等学校の一貫教育を行うエリアスクールをめざしています。

ニュージーランドでは、エリアスクールの学校が減少していますが、この学校は、あらたな挑戦にふみきろうとしているのです。この小学校は急速に児童数が増大して、かつての僻地にあったエリアスクールの学校形態を都市において実現しようとする新しいタイプの学校をめざすものです。

キリスト教の精神で学校教育の方針をめざすということは、人間教育を大切に、相手の立場を常に考えながら教育するというので、親からも大変よい評判が得られていると校長先生は語ります。教員もキリスト教をよく理解している人を採用しているということです。

学校では、子どもの個性を中心にして、授業中に、教師と直接に語るもの、床にどっかりとすわって友達と議論するもの、コンピューターをいじるものと英語の授業でも様々な姿の子どもがみられます。一斉に子どもたちが黒板にむかう姿が少ないのです。

また、休み時間の遊んでいる姿は、自由そのものです。しかし、遊びから帰ってきたら10分間は、しゃべらず集中して、授業にむかうようになっています。英語の授業であれば、10分間、黙って書かせることにしています。

カリキュラムの基礎として、言語教育と数学に力をいれている学校です。そして、すべての教科にわたって、バランスある教育を展開しています。学校教育の基本的な考えにキリスト教の精神がありますが、学問的な力をつけていくことに力を注いでいます。

この小学校の近くには、日本のトヨタ自動車の販売センターができ、全国からの部品などの問い合わせなどに即座に対応するための施設ができたところです。トヨタからは、38台のパソコンの寄贈があり、どの教室にもパソコンが導入されて、子どもが自由に使えるように配置して、個別の教育活動に貢献しているのです。

この小学校は、学校教育を評価するエローという政府機関からも、子どもの教育のために、ポー

ドオptrasティーズの運営とスタッフが、高い教育効果をあげていると1998年に評価されました。この評価は、教師を励ますと同時に、学校に入学してくる子どもの増大に役にたっていると校長先生は語ります。

#### (4) 純 農村の小学校の教育実践

##### －タラナキ小学校－

タラナキ小学校は、ワンガヌイ市から車で20分ほど南に走ったところにある純農村地域の小学校です。タラナキ小学校は、ニュージーランドでも非常に古い学校のひとつで、1840年に創立されました。国道3号線に小学校は接していますが、学校敷地内には、アスレチックを地域の親の協力などでつくっています。伝統をもっている小学校ですが、子どもが自由にのびのびと学校生活を過ごしているようです。昼の時間にわれわれが訪問しましたが、車椅子の子どもも健常者の子どもも、一緒に仲良く遊んでいる姿が印象的でした。

現在は111人の児童が勉強していますが、約3分の1が農家の子供です。自分で土地をもって農業で生計をたてている家庭です。また、3分の1がマオリ人の家庭ですが、マオリ集落のラタナ地域から30名ほどきています。

フルタイムの先生は、校長と教師5名です。教師のなかには、コンピューターに得意な教師と障害教育を専門とする教師も含まれています。また、特別に教師の援助をする補助教員は4名います。かつては、教師は教育行政からの宿舎提供で、学校の近くに住んでいましたが、現在は、学校の近くに住むことは少なくなっています。教師自身の都会志向が強く、長く農村での教師生活を希望しないためです。タラナキ小学校の教師の2名は、ワンガヌイ市から、1時間以上、車で遠方のパーマストンノース市から2名の教師が通っているのです。

ところで、タラナキ小学校で、教育に力をいれていることは、読み、書き、算数、スポーツです。農村地域の特徴として、親たちは、スポーツ活動を歓迎するのです。子どもたちもスポーツ活動には期待しています。学校では体育活動を広い視野から考えています。スポーツをとおして、広い人間的な関係を築くようにしています。スポー

ツの競技種目は、4年以上の子どもについて、一年のうち何度も他の学校と組んでチームの調整をします。学校内のスポーツチームは、男女ともタラナキ小学校のシャツと短パンを身につけます。

タラナキ小学校の7年生と8年生は、木工、料理、裁縫を習うために、マートンの街の学校にバスによって行きます。教える内容によっては、この小学校では施設が整備されていないのです。この授業は一学期ごとに10ドルの経費を子どもからとっています。

毎週火曜日の朝、それぞれの教室で、30分間外から牧師さんを招き、聖書の話を読みます。この時間は義務的に出席するものではありません。親は学校に聖書の授業を希望しなければ、学校に知らせることが必要になっています。

教室外の教育活動も大切な学校の行事ですが、タラナキ小学校では、子どもの自治活動を尊重した活動を実施しています。子どもたちは、それぞれに4つの地域的グループにわかれます。毎年子どもたちはキャンプを自分たちでもちます。上の子どもが、下の子どもの面倒をみながらキャンプをします。また、学校では、芸術や科学などの特別のグループも組織しています。

この小学校では、ボードオブトラステーズに、マオリの人がきちんと入るように配慮しています。この小学校では、マオリ人の子どもが3分の1いますが、特別のクラスをもってマオリの教育をしていません。すべての子どもに先住民としてのマオリの文化を尊重する教育を実施しているのです。それには、マオリの言語教育を基礎にして、ダンス、音学、儀式の学習をします。それらは文化的な知恵をたかめるためです。

家庭と学校との協同の関係を学校経営のなかで重視しているのも特徴です。毎週木曜日の朝に、すべての子どもを対象に、銀行からきてもらって、学校バンクを実施しています。学校での預金が可能になっているのです。

ニュージーランドの学校では学校給食はありません。昼食は、それぞれの親が責任をもって、子どもに弁当をもたせるようになっています。しかし、学校をとおして店にランチを頼めるようになっています。注文とお店との間の行き違いは学校は

責任をもたないようにしています。

農村の学校では、広大な地域から子どもたちがスクールバスで通っています。子どもの行動は、スクールバスに大きく制約されているのです。学校は午前は9時から12時30分、午後は、1時半から3時までです。朝は、8時は20分以前は学校にくることは、禁止されているのです。

#### (5) 純農村のハンタービレ小学校

ハンタービレ小学校は、パーマストンノース市から国道1号線を北に1時間ほど走った酪農地帯の小さな農村市街地にある小学校です。児童は180人いる小学校ですが、通学地域が広いので、農村の小学校としては、ニュージーランドでも大きい部類です。学校の通学範囲は20キロあるのです。約半分の子どもは農家です。

現在、ハンタービレの小学校は、8クラスもっています。フルタイムの校長と、教師は7人です。校長先生も学校経営的な仕事が50%、一般教師と同じように教育活動をするのが50%ということになっています。親は教師への援助として読書活動をしています。

学校の特徴は、校長や教師たちの活動によって、集約されますが、学校は、コミュニティや親のサポートによって支えられ、特別にスポーツ活動に力を入れています。学校では体育の日を設けて活動に力を入れています。ジャンプ、100メートル競走、1500メートル競走、砲丸投げなどの種目を競っているのです。他の学校とともに競技をしたり、遠征したりして子どもたちの視野の広がり工夫をしています。また、クリケットなどの全国的な競技の観戦に親とともに首都のウエリントンまででかけていきます。

最近では、地域でも社会経済的なギャップが広まり、親が仕事をしていない状況が増えています。そして、親が出稼ぎにいて、一人親で子どもの面倒をみている家庭が増えているのです。ハンタービレ小学校は、教育省からの教師の給料も含めての一括予算のボークファンデングの制度を受け入れています。

しかし、学校は、最近の子どもたちの社会的必要な状況に対しての特別のプログラムを組む予算はもっていません。学校の管理運営の責任機関であ

るボードオブトラスティーズは、親から5名、教師代表、校長と7名から構成されています。学校の管理維持は、学校自身によって責任をもたなければならないのが現在のニュージーランドの教育制度の特徴です。

学校は、父母と教師で構成される地域委員会をもっています。予算は、地域委員会と学校とに分離して使います。学校は地域住民が読むための地域ニュースをつくっています。地域委員会は、学校の前の子どもの安全のための道路整備や学校の庭の手入れを行います。予算は、そのために準備しています。学校があるハンタービレの街は、人口500名です。小さな田園の街で、街の地域自治会は、学校と地域委員会との結びをすることができません。

この地域では、小学校を卒業すると自分の住んでいる地域を離れて、中等学校にいかねばなりません。この小学校からは、一番近いのがマーソンの街の中等学校です。バスがでますが、遠方であるため、いっそうワンガヌイ市やパーマストンノース市の中等学校に入学して、地域を離れる子どもが多いのです。

## 第2章 ニュージーランドの貧困問題と小学校

### (1) タンギモアナ小学校の事例ー

ニュージーランドの農村は、豊かな層と貧困な農業労働者との生活差が大きくなっています。農業労働者の街では、農業経営の機械化や合理化などで働く場が少なくなっています。そこでは、多くの失業者が生まれているのです。農村の小学校も地域の経済的影響に大きく左右されていくのです。しかし、厳しい現実のなかでも地域住民による教育は、新たなとりくみをはじめています。

タンギモアナ小学校は、パーマストンノース市から車で50分ほどの海岸に面した寒村の街にあります。この小学校の地域住民は、農業労働者でありましたが、現在は多くの人が失業状況です。小学校も一時は、廃校という状況にたたされましたが、地域教育の大切さを思う住民の力によって学校再生をはたしたのです。

地域住民は300人です。小学校の児童は30人と

小規模です。21世帯から子どもが学校にかよっていますが、両親とともに、現在くらしているのは2世帯のみです。他の地域に出稼ぎして、一緒にくらしていない親、離婚しているなどいろいろの事情によるものです。

アルコール中毒の親、家庭での虐待を受けているなど、問題をかかえた家庭で育っている子どもは、この地域ではめずらしくありません。教室内でも粗暴な子どもが多くみられ、教師の指導も難しい状況があります。

95年当時、この学校は廃校が懸念されました。地域の住民は学校の廃校の計画に困惑していました。地域の親からも学校の信頼が失われて、子どもたちは、バスによって他の地域のロングティア小学校に通うものが増えました。

地域の30人近い子どものうち、残ったのは12名ほどです。学校は荒れて、子どもたちはまともに机に座るものがない状況でした。地域のボードオブトラスティーズとしても、教師もなかなかみつからないし、教師がきても早い人は半年、長くとも3年ということでした。

当時選ばれた地域の学校管理運営をする委員会のボードオブトラスティーズの議長は、学校での十分な学習ができないと地域の親から非難や中傷をされました。学校を開いていることにボードオブトラスティーズの議長として、はずかしい状況であったと当時をふりかえります。

しかし、ボードオブトラスティーズのメンバーは、個々の家庭を訪問して、学校を地域に残す大切さを父母に話していったのです。「わたしたちは自分の生まれ育った地域が好きです。また、荒れた粗暴な、穴のあいた汚れた衣服をきた子どもたちも、この地域の子どもであり、好きです」と。

どんなに教育的に困難な地域でも、地域に仕事があり、親が経済的に十分に生活できる条件があれば、よい知恵も生まれてくるものです。このためには、教育が大切であるとボードオブトラスティーズのメンバーは訴えていったのです。

75年間の伝統ある小学校ですが、親が教室内で教師の補助活動をするのは極めて少ないのです。親自身の識字教育が必要な地域で、教室内で



の教師の補助活動は難しいということです。それでも、学校経営として親の協力を積極的に求め、現在4名の親が子どもの読書活動の援助に参加するようになっています。他の地域で実施されている補助教員や親が短時間教室に入って教師の援助をすることは貧困地域では難しいと校長先生は語ります。

学校の設備も十分に整備されていませんが、アスレチックや子どもが学校内で楽しく遊べるような施設づくりに、親は手づくりで協力するように現在なっています。週末には親たちが学校にきて、清掃などの手伝いをしています。また、親の姿をみていて、子どもたちも日常的に床の掃除やごみ拾いなどもよくします。これらの手伝いは年間3000ドルにあたるとボードオプトラスティーズの会計担当者は計算しています。

フルタイムの教師は2名と校長先生で、3つの教室を担当しています。1年から3年までのクラス、4年から6年までのクラス、7年から8年のクラスと3つです。校長先生も他の2名の教師と同様に高学年の学級経営を担当しているのです。

パートタイムとして、子どもの学力試験をするときや、その他重要な学校行事のときは、地域の住民が援助してくれます。日常的でなく、つなぎ役程度の教師役です。

われわれが訪問したときは、学力調査をしているときでした。ソファにそわったひとりの子どもに、直接教師が個別面接して、英語の学力調査を丁寧にしていました。個別の学力調査を教師がしている間は、地域の人が子どもの世話をしていたのでした。中学年の教室では、子どもが大きな声で泣いていましたが、友達からいじめられたといっていました。われわれとの挨拶のなかで、泣きながら挨拶をしていたのが印象的でした。

顔も洗っていない様子ですが、しばらくして彼のほほえみを感じたのがわれわれを安心させました。地域の大人たちも子どもを世話することに苦労しているようですが、子どもたちの未来を信じて学校に様々な協力活動をしているのです。

子どもたちが、運動場で楽しく遊べるように、よじ登るネットをつくったり、古タイヤを利用しての遊び道具などを工夫したりしています。学校

の玄関の広間にいっぱい書類をひろげて、ボードオプトラスティーズの年輩の女性のメンバーが学校予算の計算を熱心していました。

彼女たちは、書類を整えることもなれていなくて、大変であるということです。国の学校評価をするエラー局が各学校を定期的に検査にいくので書類を整えておくことも必要ということです。それぞれの学校ごとに児童の数と、校区の生活水準にあわせて学校予算は算定されていますが、予算の支出は、ボードオプトラスティーズにまかせられているので、その仕事も大変なのです。

校長先生と相談しながら地域の人たちは具体的な教育予算の支出計画をたてなければならないのです。学校外の行事、教育機器、学校施設の整備などは、国からの予算だけでは不十分で、地域からの寄付などに頼らなければなりません。貧しい地域では、国からの教育予算以外は、なかなか集まらないのです。

地域の人々の参加による学校管理運営ということは、学校の民主主義的な運営にとって、大きな意味をもっていると思いますが、この学校の現状からみるならば、貧困地域においては、管理運営において重要な役割を果たす専門的に事務を支えていくスタッフ、学校の社会福祉的な整備が求められているようです。

ニュージーランドの教育省としても、社会経済的な問題からリスクをもっている子どもたちに、よりよい教育の機会を平等に与えるために、学校におけるソーシャルワーカーの配置をパイロット的に、マオリや太平洋諸島の住民の比率の高いノースランド、イーストコースト地域で行う計画をうちだしています。

ところで、タンギモアナ小学校の学校の事務員は、パートタイムで1週間17.5時間です。これでは、十分な専門的な事務運営ができませんので、ボードオプトラスティーズの会計的事務援助も要求されてきます。この学校では、予算が制限されていることからフルタイムの事務員を雇うことができないということです。事務員のサラリーの予算は年間5千ドルしか捻出できないということです(NZドル99年5月現在1ドル65円前後)。実際は、学校管理委員会に事務の仕事まで大きな負担

がかかっているのです。

毎年、400人ほどの子どもたちが集まって開かれる地方のラグビー競技に、この学校も参加しています。これは、地方の大きな行事です。しかし、この学校では、低所得の子どもが多いので、地方のラグビーの参加も難しい問題があります。このため、学校として、募金をよびかて行事の参加資金にあてているのです。

タンギモアナ小学校と他の12小学校は、連合し、共に協力して活動しています。小さな農村の学校でも子どもたちが、地方の競技遠征活動に参加できるように配慮をしています。このことは、子どもたちが小学校を卒業して中等教育学校に行くことでも大切なことです。子どもたちは小学校間の集団をとおして、他の異なる学校の子どもたちを知っていきます。

学校間の集団的な活動は、中等学校に行くための大切なステップになっているのです。多くの子どもたちは、小学校を卒業していけば、地方都市のパーマストンノース市の中等学校に行くのです。

## (2) ワンガヌイ市キャッスル小学校の実践

キャッスル小学校は、ワンガヌイ市のはずれにあるキャッスル地区の小学校です。この地域を歩くと、30年前に建てられたという、かつての公営住宅がたちならびます。この地域は、マオリ人の住民も多いのです。小学校では、マオリ文化尊重のための教室を特別につくっています。そのマオリの教室では、マオリの文化を尊重してのマオリの言語教育が行われているのです。

マオリ語は、英語とともに、1987年からニュージーランドの公用語になっています。ニュージーランドでは、経済的にイギリスとの関係がうすてれきている現在、アジア南太平洋の一員の国家という意識からも先住民のマオリ文化を大切にしているのです。マオリの文化を守っていくのも教育の力によってということからです。

ニュージーランドの教育の発展にとっての重要な課題として、マオリの文化が位置づいているのです。つまり、小学校の教育にとって、マオリの文化を教えることは、大切な課題になっています。とくに、マオリの子どもにとって、自らの文

化を身につけていくうえで、マオリの言語教育は中心な位置を占めています。

マオリの文化の教育を進めていくうえで、独自にマオリの学校をつくっていく形態、学校内にマオリのクラスを設ける形態、同じクラスのなかで白人もマオリも共に学ぶ形態とがあります。

少数の民族の人々が自らの文化を身につけていく教育と異文化の人々が共に暮らしていく教育ということで、マオリの人々の人口構成などから地域によって、教育の形態が異なっているのです。

小学校という発達段階に、子どもにとって、2つの言葉を使用しなければならないことは大きな負担になります。マオリの子どもにとって、マオリ語の教育を集中して、教育を受ける必要性が問題にされているのです。キャッスル小学校では、マオリの人々が一定の数を占めていることから独自のクラスを設けて教育をしているのです。

マオリの言語教育にとって、生活としてのマオリ言語文化の回復を援助すること、教育でのマオリの親の参加、マオリの要求よっての教育と一般的な教育の価値との関係など、マオリの教育を進めていくうえで、深めていかねばならない課題をもっているのです。

キャッスル小学校は、210人の児童がいます。障害をもっている7人の子どもは、一般の子どもと一緒にクラスで学習しますが、特別の教師の援助による教育体制をとっています。

クラスは10クラスありますが、14人のフルタイムのクラス担当教師、クラス担当のない2名のフルタイムの教師、パートタイムの補助教員、そして、校長先生ということで教師集団が構成されています。

また、学校では、親の教育現場の参加を積極的に促すプログラムを日常的につくっています。親の援助による教育活動をしているのです。この学校のどこのクラスにいても3人から4人の大人が教室のなかで子どもの教育活動にかかわっているのです。子どもが授業中に自由に選りながら様々な活動やグループをつくって学習できるのも、教室のなかに大人の教育援助者がたくさんいるためです。親の教育援助者は、33人学校にいます。教師と親は子どもの教育のための共同のスタ

ッフなのです。

マオリ語を専属に教える教室もあります。ここでは、クラス担当をもたない教師が特別に配属されています。この学校では、週に一度、金曜日の午前にすべての子どもを対象にしてのマオリ語の教育プログラムをもっています。学校では、ナショナルカリキュラムと、この地域の特徴を生かした教育を特別に実施しています。とくに、マオリ文化を大切にしたいカリキュラムをつくっているのです。

学校の児童の52%はマオリ人の家庭です。現在は、経済が厳しく、子どもの親の60%は仕事をもっていません。一人親も多いのです。家庭に恵まれないということで、問題行動を起こす子どももなかにはいます。家庭生活も厳しく、学校として、児童に対するソーシャルワークが特別に必要な状況です。学校としては、他の2つの同じような小学校の状況も含めて、ソーシャルワーカーが配属されているのです。社会福祉と学校教育との連携活動が大切になっているのです。

子どもの教育にとって、社会的なマナー、自分に対する誇り、大人や友達にたいする尊敬、助けあっていく協同の教育が大切になってきますと、校長先生は、学校教育の目標スローガンをみせながらわれわれに話していました。

学校では、コンピューター教育を特別に重視しています。教室としてコンピューターの部屋を設置するばかりではなく、どのクラスにもコンピューターが5台程設置して、子どもたちが自由にコンピューターを操作するようにしています。英語の文章をつくっていくうえで、ワープロとして使用する子どもたち、絵を書くうえで色を覚える授業にコンピューターをいじる子どもなど様々に利用しています。

授業が子どもに画一的な課題を与えるのではなく、いろいろな工夫を子どもたちにさせているのが特徴です。したがって、コンピューターをいじる子ども、はさみをつかって切り絵する子ども、友達同士で相談する子どもと、ひとつの授業でも子どもたちは多様な行動をしているのです。それを可能にしているのも、クラスのなかに補助教員、ボランティアの父母が子ども達を援助してい

るのです。

地域では、ツ・タンガタ（高く建つ）方法と称して、クラスのなかに地域の生活文化をもちよって、とくにコミュニティの親と友人たちの関係を基礎に、児童と教師の関係を大切にしたい教育が実施されています。

マオリの人々の文化は、近代社会においても自分たちの子どもの成長に必要なことを準備することができます。そして、児童のために、ESP（教育をサポートする人）と称して、大人たちが子どもとともに活動し、学校教育を援助することがやられているのです。

また、教室外の活動として、キャンプなどが、ボードオブトラスティーズと教師によって準備されています。このESPの活動は、教師と児童の関係をサポートするうえで、フルタイムの専門職のソーシャルワーカーが働いているのです。児童の個人的な問題に対応しながら、子どもの心の発達を援助してやること、子どもの学習を援助してやること、教師が大変な状況に親達が援助することなどを行っています。

ESPのメンバーになるには、特別の公的な資格はいりませんが、ESPの仕事を理解し、よい生活文化スタイルをもっていることが必要ですが、子どもの発達とコミュニティに対して援助していこうとする情熱をもっていることが大切な条件です。

このプログラムは、マオリの地域文化から学んでいます。しかし、マオリの子どもや地域ではなく、すべての地域を対象にしているものです。また、問題をもっている子どもばかりでなく、地域のすべての子どもを対象にした活動です。つまり、活動を特殊な地域や層のための利益にしないようにしているのです。

キャッスル小学校のコミュニティでは、子どもの健康を守っていくために、教員と父母が共に活動していくプログラムがくまれています。そのプログラムは地域の子どもたちすべての健康と福祉を支えていくものです。毎週の月曜日の午前に子どもの健康を守る看護婦さんが学校にいらいます。彼女は親または子どもの保護者に連絡し、学校コミュニティとの連携をして、子どもの健康を

守る活動を展開しています。

学校教育活動としても、親または保護者への定例的な連絡、接触を重視しています。教育活動のプログラムについての話し合い、子どもに対する期待での親との話し合い、個別に親との面接、親のための学校の開放の日の設置、教師からの親への報告などを実施しています。

キャッスル小学校のボードオブトラスティーズは毎月定例的に学校新聞を発行しているのです。小学校の教育活動を進めていくうえで、父母や校区のコミュニティ委員会との連携を重視しているのです。学校と親または保護者との連絡に、それぞれの子どもをとおしてして実行しています。

親や保護者と学校教育活動や家庭の子どもの様子などを、学校と父母の双方が理解していくうえで、PTAという親と教師の会が、組織されていることも大切なことです。定例的に会合を開き、学校の多様な活動を支える組織として展開しているのです。

地域によっては、教育委員会の廃止による各ボードオブトラスティーズの権限の委嘱などで父母代表の委員の仕事に負担が増して、PTA活動が下火になっていったところも少なくありませんが、キャッスル小学校では、PTAがボードオブトラスティーズの活動を支えているのです。

この小学校では、子どもが何等かの理由で学校を欠席する場合には、きちんと朝8時15分までに連絡することが定められているのです。学校教育活動の自由性のなかにも、一日の学校のはじまりのきまりは重要性をもっているということです。

### 第3章 中等教育の学校教育実践

#### (1) ニュージーランドの中等教育の現状

ニュージーランドの中等教育学校は、初等学校に比較すると、その学校数が、極めて少ないのです。1997年の教育省統計では、小学校数2293校に対して、338校です。このうち、320校が公立学校です。

学校規模は、最も大きい学校は、2133人の生徒がいますが、平均的な数は、702人です。農村には、中等教育学校が極めて少ないのです。1997年の教育省統計では、農村に中等教育学校があるの

は、全体の中等教育学校数の比率8%で、生徒数比率で4%不足です。統計的に小さな町と主な都市に分けて数字をだしています。

小さな町にある学校数の比率は31%、生徒数の比率で24%、主な都市内にある学校数比率61%、生徒数比率72%と中等教育学校の存在は、都市に集中しているのです。しかし、都市といっても日本のような巨大都市ではなく、100万都市のオークランド市を除けば、広大な農村に囲まれた市街地形成が多いのです。つまり、農村的要素をもった都市が多いのです。

ナショナルカリキュラムで基本的に7つの領域に科目が分かれています。中等教育学校では、その7つの領域は、さらに、細分化されて教えられます。言語教育の場合は、外国語が入ってきます。

日本の場合は、国語と英語ということで多くの高等学校の場合、分けていますが、外国語と自国の言語ということで言語教育の領域を分けていません。マオリの言語も尊重しての教育が行われ、英語だけがニュージーランドの自国語という位置づけではないのです。

外国語の科目は、それぞれの中等教育学校で設置されていますが、日本語は、どこの中等教育学校でも設置されている人気のある外国語のひとつです。ニュージーランドとの貿易相手国として、日本が大きな位置を占めていますが、そのことが、外国語としての日本語の人気の要因になっています。

ニュージーランドにおいて、日本語の教師になるためには、教員養成大学、または、教育学部で日本語の教員資格を得れば、外国人である日本人でも、その道が開けていきます。日本では、英語圏から補助教員として学校教育に外国人を受け入れていますが、正式の教員としない日本における公立の英語教師の仕組みと大きく異なっています。

ニュージーランドで教育を受けたいと思う日本人の高校生も少なくありません。それぞれの中等教育学校で日本人をはじめとする外国人の高校生を積極的に受け入れているのもニュージーランドの特徴です。中等教育学校のカリキュラムに

は、外国人のための特別の授業が設置されています。とくに、英語には少人数教育で力を入れた教育をしています。外国人のためにと、教育組織のなかに、きちんとした教育組織の位置づけがあるのです。

自然科学や社会科学の科目は、中等教育の1年、2年の段階では、細分化されていません。しかし、中等教育3年になると生物、化学、物理に分かれていきます。

社会科学分野を例に、中等教育の教育内容を検討してみると、日本とは大きな違いがあります。社会科学分野も2年までは、社会研究となっています。中等教育の3年（日本の高校1年）になると、社会研究と同時に、地理、歴史、経済となります。経済は、すでに希望選択科目として、中等教育1年の段階から設けられています。

社会研究の科目の目的と課題領域については、すでに初等教育の教育実践のところでのべましたが、中等教育段階になりますと、レベル4からレベル8となっています。

レベル4は初等教育の高学年からはじまっています。社会研究の社会組織の課題の4レベルは、次のような課題を考えさせるようにしています。

「どのようにして人々は、手応えある仕事と重大な局面に責任をもって自分たち自身を組織していくか。いかにして、人々は、権利と自己の責任にむかっていくのか」。

レベル5は、「政府のしくみは、どのようにして人々の生活を組織し、影響をあたえていくのか」ということで、異なる政治のしくみについて理解し、選挙権、法律の制定、政策という議会制民主主義の決定過程について学び、政府の決定が人々に与える影響などについて説明を受けるような授業展開です。

さらに、「人々はどういうようにして、なぜ、社会的正義と人権を手にいれて、守っていくのか」ということを考えさせています。

レベル6は、「人々は、どのようにして、なぜ、社会における体制やしくみを吟味するために組織されるのか」といことで、家族、政党、宗教、教育制度などの社会における異なるタイプを確認して、その体制やしくみがなぜ生まれたの

か、変化を求めるとの人々の動機などを学ぶことにしています。

また、社会における人々の権利、規則、責任性の変化の影響について、とくに、科学技術、社会、政治、経済の変化が、それらに与える影響について考えさせています。

レベル7は、「どのようにして、なぜ、国際的組織は、確立し、人々と社会に影響をあたえていくか」ということで、国際組織の目的と行動について理解し、国際的組織の発展を描き、国際組織が個人、文化、地域、民族に影響をあたえることを学ぶこととしています。

そして、「どのようにして、地域と民族は責任をもち、権利の行使をするのか」ということで、権利の確立の方法について考えさせています。

レベル8は、異なる考えについて、社会は組織されるべき方法として、政党、関心あるグループをあげ、少数民族のグループと個人が、異なる考えを保有していくことを学んでいきます。

また、改革の本質と改革の影響は、個人と地域の権利、規則、責任性のうえになりたっていくことを学んでいくとしています。そして、特別に社会、政治、経済、法の改革とそれらの関係について理解することが必要としています。

以上のように社会研究は、具体的な課題を生徒たちに提起して、民主主義の内容を様々な角度から考えさせていく方式をとっているのです。この考えの過程のなかで、社会科学的知識や事実を学んでいくことにしているのです。この社会科の授業の方式は、ニュージーランドの伝統的な教育方法でもあるのです。そして、中等教育の後期になりますと社会科学的な基礎知識として、地理学、歴史学、経済学を学んでいくのです。

ところで、大学入学資格のための試験は、5科目選択ですが、それぞれの細分化された教科によって受験します。中等教育の後期は、より専門性を求めて教科が細分化されていくのです。

ニュージーランドでは、大学入学の激しい受験競争がないのです。18歳の大学入学には、全国的な大学入学資格試験がありますが、そこでは、それぞれの科目ごとに優秀な生徒が判定されていきます。一般新聞でも、どこの中等学校がバーセリ

Aの生徒が、どの位の割合であるかということが公表されます。

このかぎりでは、学校間の競走がありますが、日本のように、中学校から高校を選択するうえで、偏差値的な学力の振り分けはないのです。バーセリの結果は学校選択のひとつの判断基準になりますが、それだけで子どもたちが学校選択の理由にしていないのです。

バーセリで失敗しても、20歳になれば、だれでも自由に大学の講義を受けられます。いうまでもなく、単位の認定は厳しくしています。中等教育学校の段階で自己の選択ができるように配慮した教育をしているのです。

また、その自己選択が絶対的に将来を左右するのではなく、いくつになっても勉強したければ、大学への講義が自由にうけられしくみなのです。このことが、中等教育学校における生徒の生活をより自由に行っているのです。

## (2) パーマストンノース市のガールズハイスクール

パーマストンノース市のガールズハイスクールは、1150人の生徒をもつ大きな5年制の中等教育学校です。公立学校ですが、女子生徒のみの学校です。この他にパーマストンノース市には、6つの公立学校がありますが、2つはキリスト教の精神で学校経営をしております。

パーマストンノース市内には、男子生徒のみの公立のボーイズハイスクールもあります。また、男女共学の5年制の中等教育学校もあります。音楽に力を入れている学校、美術に力を入れている学校、技術教育に力を入れている学校と様々ですが、生徒たちは、自由に学校を選択するのです。日本のように、高校の入学が偏差値学力で振り分けられることはないのです。

ニュージーランドでの中等教育では、男女共学の学校と並列して、ガールズハイスクールとボーイズハイスクールがどこの都市にいてもあります。中等教育学校では、男女共学が必ずしも一般的ではないのです。男女別々に教育がされているのです。

学校のなかでは、自主的に生徒たちが地域のボランティア活動に参加したりしています。生徒た

ちは、飢餓のアフリカの子どもたちと連帯するとして、48時間の断食をして、その間の食費をアフリカにカンパするというをしたり、難病の子どもたちの募金活動をしたりしています。

これらの活動は学校が強制するのではなく、多くの生徒が自主的にとりくみ、学校の雰囲気として、生徒にとって当然のようにとりくまれるのです。48時間の断食は大変厳しいというところで、飢餓で苦しむ子どもたちが、地球上にたくさんいることを体をとおして学んでいるのです。

パーマストンノースのガールズハイスクールは、義務教育としての必修の科目は、英語、数学、自然科学、社会研究、体の教育です。選択する科目は、芸術、音楽、外国語、食物技術、経済などです。

これらの選択科目は、中等教育の1学年から3学年までは分かれています。4年になると英語以外は選択科目で、5年になるとバーセリという全国の大学入試科目を自由に選択して学習すること、バーセリという科目に入っていない環境問題、子どもの発達学習、コンピューター学習などをします。

ガールズハイスクールで開講しているバーセリの科目は、英語、数学、生物、化学、物理、地理、歴史、体の教育、音楽、芸術の実践、芸術の歴史、デザインと技術、グラフィックデザイン、外国語（フランス語、ドイツ語、日本語）、マオリ語と文化、古典研究、会計、経済などです。

大学進学を希望する生徒たちは、この科目のなかから5科目を選んで全国の大学入学の資格試験に備えるのです。98年度のバーセリの成績は、33%がAの成績で、40%がBということで、C以下の成績の子どもは極めてすくない中等学校です。

この試験で優秀な成績をとった生徒は、授業の免除や奨学金などの特典を得るのです。しかし、医学系の一部の専門を除いて、生徒は、バーセリの試験結果と関係なく、20歳になれば、大学の講義を自己責任のもとに受講できるのです。

## (3) パーマストンノース市街から郊外の農村の中等学校

— ロングバーン・アドベンテスト・カレッジ  
この学校は、1992年にインテグレイトスクール

として、従前の教会が経営した私立の学校から公立の学校に変わったのです。30エーカーをもつ学校の敷地は緑の木々に囲まれています。学校のまわりは、農村地帯です。

この学校は、92年に、特別の教育内容の性格をもっている公立学校として、再出発しました。しかし、伝統的に聖書を教育の柱としていることは、現在でも変わりません。学校のなかにも教会があります。教会と学校はパートナーとしての密接な関係をもっているのです。

92年からは、小学校の7年、8年までを入れた7年制の中等教育学校として出発しました。現在、207名のうち、この学校に入学してくる生徒は、95%がキリスト教徒です。60名の生徒が寮生活をしています。多くがキリスト教徒の子弟ですが、学校生活では、男女共学ですし、多様な文化の尊重を大切な価値としています。また、地域サービスとの関係も大切にしています。

日本の広島の高校と姉妹校を結び、日本からの留学生も7名学んでいます。このうち4名は1年間の留学です。また、短期の語学研修として、1ヶ月間学びにくる高校生もいます。外国人が英語などを少人数で学べるように、特別のクラスを設けて、授業方法にも、その国の文化的関心をとりいれながらの教育実践をしています。日本の生徒が7人いるということから日本文化の情報なども積極的にとりいれているのです。

この学校は、1908年が創立で伝統をもっています。創立のときはハミルトンにありましたが、1913年に当地に移転して、伝統的に教会の牧師を養成するための学校として位置づいていました。そして、農村の学校としての特徴をもたせながら小人数の家族的な教育を大切にしてきた学校です。歴史的に、学校が大家族として、野菜づくり、牧畜、農産物加工、手工芸品製造をしてきたのです。

現在では、上学年になると生徒の数が増えて行きますが、上学年の7年生の生徒が最も多くなっています。家族的な雰囲気の中かで授業を展開しているのです。コアカリキュラムに聖書を位置づけていますが、学校年数9年目と10年目は、義務教育の段階になっている中等教育ですので、この

学校では必修のコアカリキュラムが多くなっています。中等教育の前期の段階で科学の義務教育段階の学力資格をとっていないければ、物理や化学の授業に出席することができません。理科教育の場合は、系統的な学力を要求しているのです。

しかし、この学校の特色として、大学入学資格のためのバーセリのための学力をつけるための教育を中等教育の最後の年にやっていないのです。中等教育の最後の年からもどって、2年間に特別のカリキュラムをつくって系統的な教育をしているのです。資格庁と協議して、バーセリの代わりになる試験を学校内で実施しているのです。

この場合は、スカラーシップやバーセリAのような成績優秀という特典はありませんが、1年間に何度も試験をして、バーセリにあたるような大学入学資格試験を学内で実施して、大学入学資格を得るのです。いろいろな進路をとる生徒が多いため、この学校では、特別の大学入学資格制度を学校内で実施することが認められたのです。バーセリAの成績はありませんが、Bクラスの成績は、18%となっています。それぞれの細分化された教科によって受験します。

中等教育の後期は、より専門性を求めて教科が細分化されていくのです。多くの公立学校では、バーセリで優秀な生徒をだそうと競争していますので、なかなかこの制度をとりいれないと学校長は語ります。

ニュージーランドでは、中等教育学校が自由に選択できますので、学校の社会的評判は学校経営にとって大きいのです。もちろん学校の評価は、バーセリの成績によって、決まるわけではありません。それぞれ特色をだして、生徒を集めているのです。子どもの将来に対する価値が多様化していますので、学力だけで生徒を価値判断しないのがニュージーランドの大きな特徴です。

この学校の校長は数学の教師として、第1線の教育活動をしています。つまり、学校経営に専念するということで、教育活動から離れることはないのです。ニュージーランドでは、地方の教育委員会が廃止されて、学校と教育省との直接の関係になり、校長の経営的な能力が大きく問われるようになってきています。

しかし、この学校の校長は、第1線の教師としての教育活動から離れていないのです。われわれが訪問したときも数学の授業をみせてくれましたが、子どもたちに具体的な暮らしとの関係で問題をなげかけ、生徒を笑わせながらの楽しい授業を展開していました。

#### (4) 酪農地域のオプナケ高等学校

オプナケ高等学校は、農村の小さな市街地であり、学齢9年生から13年生までの5年制のタラナキ山の麓の酪農地帯農村にある中等学校です。地域は、雨に恵まれており、伝統的に豊かな酪農の農家が多かったのです。地域の酪農業は機械化が進み、農村労働者は、この地域に住まなくなっています。

生徒は350名いますが、留学生は、7名です。留学生の生活は、地域でのホームステイによってひきうけています。日本人で、日本語のアシスタントとして、今年の2月に、赴任された若い教師は、地域にホームステイして、学校生活を楽しんでいます。

彼女は、農村が好きなので、この学校を選んだと語っていました。日本人の高校生などが留学して、広々とした自然のなかで、農村の豊かな人間関係に支えられて英語が習得できればすばらしいことであると語っていました。

オプナケ高等学校は、地域に学ぶということで様々なプログラムを用意していますが、生徒たちの希望や教えるのに特別の計画をたてて、クラスをすべて設けることは、困難です。相対的にみて、オプナケ高等学校は、小さな学校ですので、個人プログラムは、学校のサポートセンターをとおして、学ぶようになっています。サポートセンターは、ポリテクニクや通信制学校にも援助してもらっています。学齢9年と10年では、ナショナルカリキュラムの保健体育、芸術、テクノロジー、社会科学、自然科学、数学、言語と7つの領域の学習をすべての生徒に行っています。学校として、とくに重視しているのは、コンピューター教育、マオリ文化教育、農村研究、芸術、演劇活動です。

日本の中学2年と3年にあたる9年生と10年生には、芸術と演劇の科目を必修にしています。芸

術活動では、様々な分野の基礎的知識と技術を学習しています。演劇活動では、生徒たちの自信と自分への誇りを身につけることと、グループでの相互影響のためのねらいとして重視しているのです。

芸術科目を重視しているところは、13学年生の学年にみられます。この学年は大学進学のためには、バーセリの試験科目のために学習に集中するのですが、この学校は、バーセリの試験の準備のための科目は準備しますが、とくに芸術関係の科目を数多く開いて、その特徴をだしているのです。アートデザイン、絵画、個人のパフォーマンスをのぼすこととデザインを結びつけた創作芸術、彫刻、芸術の歴史などの科目を開いています。

ところで、農村地域の学校ということから、農業や農村についての基礎的知識や技術を大切にしているのも、この学校の特徴です。10年生に、農村研究、11年生と12年生に農業の科目を独立して設定しています。

農村研究の科目内容は、園芸の一般的理解、ニュージーランドにおける農業と一般的産業の理解をねらいとして、具体的には、栽培の世話のための一般的技術、植物の機能や構造の理解、多様な方法の使用による栽培のプログラム、実験的プロジェクト、農業の基本的な事項と原理を認識させるような内容となっています。そして、野菜の栽培、庭と農場の安全性、ニュージーランドの農場システム、動物の生産、動物の健康管理、動物の餌としての牧草などを学習しています。

農業の科目は、ニュージーランド農業の状況についての理解、ニュージーランド経済における牧草や作物についての理解、土壌についての理解、動物の栄養と健康についての理解、動物の再生産と改良についての理解などとなっています。とくに、酪農地帯ということから地域との関係で、動物の栄養と健康、動物の再生産の基礎的な知識と技術に授業内容の力点が入っています。

学校では、学齢9年生の入学時からマオリ文化を学ぶことを義務的としています。マオリの文化では、歌や習慣を学んでいます。学校教育実践の特徴として、マオリ文化の「ファナウ」という家族と地域協同による社会的な助け合いのネット



ワークワーを社会科教育とコミュニケーションの技術を拾得する教育として大切にしています。すべての学年の生徒は、5つの「ファナウ」というグループに分かれて、協同の活動をするのです。ファナウはマオリの地域家族共同社会を構成していくうえで、重要な機能的な家族共同の絆なのです。マオリの共同社会には、機能的に様々なファナウがあるのです。学校では余暇活動のグループ活動の相互援助や結束にファナウの機能を応用しているのです。

学校は、家庭との連携も積極的にもっています。親は読み書きの回復を含みながら、設備の準備やコーチに協力をしてもらっているのです。学校は成人のための夜の教室を設けているのです。

### 参考文献

- Ministry of Education (1998) : The NEW ZEALAND CURRICULAM FRAMEWORK, Ministry of Education, Wellington
- Ministry of Education (1998) : SCHOOLING IN NEW ZEALAND , Ministry of Education, Wellington
- Tu Tangata L. td (1998) : Bringing Community Lifeskills into the Classroom, Tu Tangata Ltd. Wellington
- Ministry of Education (1998) : SOCIAL STUDIES in the New Zealand CURRICULUM, Ministry of Education, Wellington
- Ministry of Education (1998) : JAPANESE in the New Zealand CURRICULUM, Ministry of Education, Wellington
- Ministry of Education (1998) : HEALTH PHYSICAL EDUCATION in the New Zealand CURRICULUM, Ministry of Education, Wellington
- Gary McCulloch (1992) : The School Curriculum in New Zealand : The Dunmore Press, Palerston North NZ
- Lisa Emerson (1998) : Writing Guidelines for Social Science Students, The Dunmore Press, Palerston North NZ